

脳卒中者は作業療法士との協業をどのように経験しているか？

-1 事例へのインタビューを用いた仮モデルの作成-

(医) 康心会 ふれあい町田ホスピタルリハビリテーション科

○ 小林 幸治

【キーワード】 作業療法, 協業, 脳卒中, インタビュー, 回復期

【はじめに】

保健医療領域では治療者と患者の関係として協業が一層重要視され、協業は「説明と合意」を現場で具体化する方法とされる(山田, 2002)。わが国の作業療法(以下 OT)領域で患者との協業に関する原著論文を検索すると17件報告があった。OTの主たる対象の脳卒中者には、心理社会面の問題を伴うことが多いことが知られているが、脳卒中者との協業の報告は17件中3件と少ない。先行研究で筆者ら(2009)は、脳卒中者と作業療法士(以下 OTR)の協業は、「目標を共有」「共に話し合い試す」「本人が主体的に取り組めるよう介入」「本人の自己決定を尊重」「治療計画を見直す」の5カテゴリーから構成されるとした。

【目的】

脳卒中者とOTRの協業は、治療を効果的かつ検証的に進める方法であり、両者間での協業が成立する過程のモデルを作る必要があると思われる。これは両者間の治療的関係の構築や、脳卒中者にOTRが与える影響を考える際の基準的枠組みとなると期待される。本研究の目的は、一事例を通じて仮モデルを作成することにある。

【対象】

70代女性脳卒中患者。発症し脳神経外科病院にて保存加療、1.5カ月後回復期リハ病棟のある病院へ転入院し4カ月間OT(筆者担当)などのリハを受けて自宅退院、その後週2回デイケア通所中である。事例は回復期リハ病棟入院中、OT実施過程で上記5つの協業のカテゴリーを満たし、本人もそのことに合意したため対象とした。なお事例より口頭と紙面での同意を得た。

【方法】

筆者は退院5カ月後に事例から手紙を頂いた。そこに入院中のOTの思い出とともに、退院後の落ち込みと立ち直りの様子が記されていた。筆者は事例と連絡を取り、倒れた日から1年を迎える不安などを聞いた。発症1年1カ月後2009年5月2日、事例自宅にて2時間のインタビューを実施。現在の生活、今後の生活、入院中の様子、OTの印象、OTで意味があったものとなかったもの、自信を取り戻すきっかけ、などの質問項目からなるインタビューガイドを事前に用意し、半構造化面接とした。実施後、録音したインタビューを書き起こした。インタビューデータの他、手紙、インタビュー時の筆記記録を分析対象とした。分析ワークシート(木下, 2003)を用いて概念を作成、概念からカテゴリーを作成し、カテゴリー間の関係をまとめた。

【結果】

事例は退院後にもうOTが受けられない、「私は半身まひのどこにも助ける人のいない年寄り」になったと落ち込んだ。現実には夫や娘に介護されながらも、立ち直りに長く苦しんだ。前院のできない自分を厳しく叱るスタッフという負のイメージに対し、転院後にリハを受けた4カ月は今となっては「夢のような温かい霧に包まれて」いたイメージを持つ。その期間、事例はトイレに一人で行きたい、箸が持てるようになりたい、といった要望に応えたOTRを通して、成果が出る中で自分自身のリハへ没入した。事例にとってOTRはできるようになって認めてもらいたい存在となり、OTRとの会話を通じて自尊心を取り戻した。その経験が、退院後生活とのギャップとなったが、OT経験を思い起こすことが立ち直りの一助にもなっていた。

【考察】

経験的に、多くの脳卒中者に自宅退院後、現実検討を強いられる時期の落ち込みが共通してみられる。一方、発症直後には衝撃や怖れから全てを専門家に委ねたいと願うが病院では十分対処されない(Pound, 1995)。事例のように、回復期には身体面の回復だけでなく、専門職との心理社会面の支援を得る関係を通して自己の回復を図ると思われる。この時期にOTRには、その人が以前構築してきた道と確実に結びつくようなケア(Clark, 1996)を意識した関わりが必要となると考えられた。